

ずいそう



龍馬と江藤新平

光 石 正 幸



歴史好きの私はNHKの大河ドラマをよく見る。今年の「花燃ゆ」は吉田松陰の妹を通して幕末・明治維新の青春群像を描くという。出だしの視聴率が低迷していると週刊誌などであれやこれや言われているが、私は萩の松陰神社に現存する塾の家屋を見学したこともあるので結構楽しんで見ている。

ところで幕末・明治維新に活躍した人物で、日本人が一番好きな人物を挙げるなら吉田松陰よりも坂本龍馬であることはほぼ異論はなかろう。2010年の大河「龍馬伝」はよくできていて面白かった。近年視聴率が低調気味の中で平均で18.7%と健闘した。主演の福山雅治の人気も影響したかもしれないが、龍馬だけでなく、武市半平太、岩崎弥太郎、岡田以蔵等、他の登場人物も魅力的に描かれていた。その年は龍馬ブームが起き、書店の歴史物の棚には龍馬に関する本が山積みされた。龍馬ゆかりの場所は観光客ラッシュになった。

坂本龍馬に対する現代人が抱くイメージは司馬遼太郎の「竜馬がゆく」が作り上げたといわれるが、このイメージを否定するような有力な説はないそうだ。その龍馬のイメージとは「無私」「先見性」「行動力」「天性の明るさ」、そして「悲劇性」である。日本人はこれらの要素を好む。これにミステリーが加わるとベストだ。無類の交渉力で、薩長同盟を実現し、大政奉還から明治維新に至る大変革の道筋をつけ、維新直前の12月、何者かに暗殺された、この若き革命家はかくして伝説になり日本人の理想像になった。

しかし……私は、明治維新といえば、わが郷土の異才、江藤新平に想いを馳せる。龍馬が明治維新の光り輝く存在であるとすれば、その対極の存在に思える江藤新平は肥前、現在の佐賀県鍋島町に生まれた。私の故郷の隣町である。坂本龍馬は1836年1月に生まれ1867年12月に逝った。享年31歳である。江藤新平は龍馬より2年早い1834年3月に生まれ1873年4月に39歳で刑死している。二人はほぼ同時期に生きたがその人生が交差することはなかった。龍馬が明治維新までの筋道をつけたのに対し、維新以降、江藤は初代司法卿として天才的な能力を発揮し司法・立法・警察・教育と近代日本の骨格を築いた。ある意味では龍馬以上の功績を上げたと言ってよい。しかし龍馬ほど

現代人には親しまれていない。

私が幕末・明治維新の立役者で悲劇的な最期を遂げた人物を三人挙げるなら龍馬、西郷、江藤だ。しかし江藤の知名度は龍馬、西郷の足元にも及ばない。そもそも江藤の代わりに吉田松陰の名を挙げるべきかもしれない。ただ近年、毛利敏彦氏の著書「江藤新平―急進的改革者の悲劇」「明治六年政変」（両方とも中公新書）をきっかけに、長く歴史に埋もれていた江藤の業績が再評価され、世の中に広がりつつあることは同郷人としてはうれしいことだ。

江藤のイメージと龍馬のそれを比較すれば決定的に違うのが、江藤の持つ、暗いイメージである。これはどこから来るのか。赤貧の少年時代、学問を唯一の武器として成り上がった経歴、佐賀人特有の妥協を許さない性格、その性格ゆえ藩閥政治の実力者山縣有朋や井上馨の不正に対し一切妥協せず追及し、やがて政府内で孤立、最後は政敵大久保利通の姦計に陥り下野し、反逆者として処刑される。そのあまりの無残さか。残されている写真をみると、おおらかな風貌の龍馬に対し、江藤は現代的で理知的な顔立ちをしており、土方歳三にも似た好男子である。ただし土方ほどの甘いマスクではなくどこか暗い影を宿している。

幕末・浪漫の時代に革命家、思想家として活躍した坂本龍馬から遅れて表舞台に登場した江藤新平は、明治・実務の時代において近代最初のテクノラートとして天才的な腕をふるい、国の基礎を作り上げた。「明治維新の現場に江藤が居合わせたのは奇跡だった」と毛利氏は書いている。

しかし、同郷の大隈重信のように清濁併せ呑む器用さも持ち合わせず、最後は自ら作った司法制度によって革命家として死んだ。後の時代の日本人に親しまれるエピソードもあまり残さず、あっという間に歴史の舞台から退場した。

龍馬を国民的英雄にした司馬遼は、しかし、小説「歳月」でこの不器用だが無私で一途な心を持った理想主義者に対しても優しいまなざしをそそいでいるかのようだ。